

【原著論文】

臨時休校中のメディア接触増加要因 ～新型コロナ禍の中でのメディア接触実態調査の分析を通して～

本間 史祥・伊藤 賢一

子どものネットリスク教育研究会・理論社会学研究室

Factors which Increase Media Contact during School Closure: An Analysis of a Survey of Media Contact during the COVID-19 Epidemic

Fumiaki HONMA・Kenichi ITO

The Society for Risk Education for Children on the Internet・Sociological Theories

Abstract

Schools across Japan have been temporarily closed since March 2, 2020 in order to control the spread of the COVID-19 infection. Amid concerns about the prolonged use of the Internet and smartphones, we conducted a survey of media contact among parents of elementary school children in the midst of the epidemic. The purpose of this study is to pursue the factors that led to the increase in media contact among children. As a result, “spending time alone at home” increases media contact the most, but it also increases when children were with their parents or grandparents. There is no statistically significant relationship between the new device used and the increase or decrease in media contact. In addition, the factor that suppresses media contact is “physical activity in parks and other outdoor places.” It is suggested that even during special periods such as temporary school closures, media contact may be suppressed by performing non-media contact activities as usual.

キーワード： コロナ禍, 小学生, メディア接触, 増加要因

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19, 以下新型コロナ）の拡大抑制の目的で、全国の小中高校が2020年3月2日から臨時休校となった。また、2020年4月7日には新型インフルエンザ等対策特別措置法第32条第1項に基づき、2020年4月7日～5月6日まで緊急事態宣言が発出された。その後、区域変更や期間延長を行い、2020年5月25日に緊急事態宣言が解除され、その間、全国の多くの小中高校は臨時休校となり、地域差はあるが、期間は最大約3ヵ月に及んだ。未曾有の出来事であり、

学校現場をはじめ、日本全国が混乱に包まれた。その中でも特に大きな影響を受けたのが、突然登校できなくなった小中高校の子どもたちである。

三菱UFJリサーチ&コンサルティングの調査（2020、回答者は保護者）によると、回答者の約8割は学校や保育所等が休校・休園となり利用できなくなったと回答し、小学生36.3%、中学生67.0%、高校生74.0%が日中は子どもだけで過ごしていると回答している。外出自粛も伴い、平日・休日問わず、ほとんどの子どもたちが自宅で過ごしていることがうかがえる。また、TesTeeLabの調査（2020、回答者は本人）によると、新型コロナ禍で中学生の72.2%、高校生の71.5%がスマホの利用が増えたと回答している。また、自宅内で増えた行動として、最も多いのは睡眠だが、次に多いのがゲームである（中学生43.1%、高校生33.1%が増えたと回答）。LINE株式会社の調査（2020）では、新型コロナ禍による外出自粛の影響で、グループトークの利用回数が全世代で増加したが、その増加率が最も高いのは10代の利用者であるとのことである。

各種調査からも、臨時休校期間にネット・ゲームの利用は増加していることが考えられ、その影響により、生活リズムの乱れや健康被害等も懸念される。臨時休校中の子どもたちのネット・ゲーム接触状況を把握することは、今後の新型コロナ流行による臨時休校で、子どもたちのネット・ゲーム漬けから守るために重要であると考えられる。

われわれは新型コロナ禍により、児童・生徒たちはどのように過ごしているのか、どのような影響が出ているのか、保護者はどのような懸念を持っているのか、その全体像を明らかにする目的で、小学生の保護者を対象にしたWeb調査「新型コロナ禍の中でのメディア接触実態調査（以下、新型コロナ禍メディア調査）」を実施した（「ネット健康被害」調査・研究プロジェクト,2020;古野,2020）。その速報値及び簡易報告書は2020年5月27日にプレスリリースされたが（7月9日に一部訂正）、休校中に35%の家庭で新たなネット機器を措置し、9割以上の小学生は何らかのネット機器が使える環境にあったこと、メディア接触は以前に比べ8割の児童に増加が認められたこと等がわかっている。

上記の研究チームは、休校期間中の健康状態を問う質問項目に対する回答の因子分析に基づいて子どもたちの「疲労度」を算出し、メディア利用を目的別に群分けしたグループとクロス集計を行っている。その結果、オンライン学習が児童に対して高い疲労を起している可能性や学習に使用する機器がスマートフォンの場合、疲労度が高いなどの示唆を得た。しかし、保護者が観察した児童の様子を元に回答していること、保護者の意識や家庭の状況に偏りがある可能性、分類を細分化した時にサンプル数が減ったことなど、調査項目や対象、分析方法に一定の課題がある。

本稿は、新型コロナ禍メディア調査の簡易報告書作成時点では未検討であった回答結果について、新たな視点で再分析をしたものである。特に、以前に比べてメディア接触が増えたと回答した保護者が8割いたことから、「メディア接触増加の要因」を明らかにすることを目的とするものである。

2. 調査設計

2.1. 実施時期と方法

調査は2020年5月1日～7日にWebで行った。実施は楽天インサイト株式会社に依頼した。対象は全国の小学生の子どもがいる保護者1,300名である。休校期間は地域によって異なるため、「4月20～25日」と期間を指定し、この間の子ども様子を回想して答えてもらった。小学生の子どもが複数いる場合には、年齢が下の子どもについて回答を求めた。

表1 有効回答者数（学年・学校種別）

		児童学年						合計
		小1	小2	小3	小4	小5	小6	
児童	男子	140	111	133	104	73	84	645
	女子	131	118	129	94	93	90	655
合計		271	229	262	198	166	174	1300

2.2. 分析の視点（先行研究の整理）

分析の視点を得る上で、本稿の目的であるメディア接触増加要因に関連する先行研究を整理する。伊藤（2017）は、群馬県前橋市の小学5、6年生と中学生全学年に抽出調査を行い（有効回答数は小学生2,682（回収率98.0%）、中学生2,448（回収率97.0%））、小中学生のネット依存に関するリスク要因を探究している（ネット依存リスク群の測定ツールはKスケールを用いている）。調査結果から、小中学生のネット依存に関するリスク要因として、LINEや動画サイト、オンラインゲームといったコンテンツは、過度のネット利用に結び付きやすく、ネット依存傾向は生活の不満足と関連していることを報告している。

さらに伊藤（2018）は、伊藤（2017）に引き続き、群馬県前橋市の小学5、6年生と中学生全学年に抽出調査を行い（有効回答数は小学生2,562（回収率98.6%）、中学生3,495（回収率96.7%））、ネット依存高リスク利用者が利用しているネットサービスやアプリ、生活満足度との関係について、追究している。その結果から、ネット依存の高リスク利用者が特に利用しているネットサービスはLINEやゲームアプリ以上に動画サイトであること、ネット依存度スコアと生活満足度について、学校での勉強の理解や学校生活への満足度の影響が「家族団らん」や生徒自身の「将来の夢」よりも大きいことを報告している。伊藤（2017, 2018）の研究から、ネット依存に陥るリスク要因として、コンテンツと学校での自己有用感が関連していることが予想される。

藤田（2018）はインターネット依存が家族関係に与える影響について、小学4～6年生、中学1～3年生とその保護者（ペアリング）1,015名を対象に調査した（ネット依存傾向の測定にはヤングテストを用いている）。その結果から、インターネット依存傾向がある生徒の保護者の内、4割は「依存していない」と認識していることを報告している。藤田は「子どものインターネット依存に対して、気に

はしていてもそこまでの危機感をもつまでには至っていない」と述べている。

厚見・安藤(2019)はインターネット依存傾向形成要因に関して、特にスマートフォンに限定して、スマートフォン依存傾向の構成要素と退屈感及び対人関係の関連について検討し、大学生・大学院生242名を対象に調査した結果、退屈を抑え込むことがスマホ使用の目的となっており、退屈傾向はスマホ依存傾向の1つの指標と考えられると述べている。

また、樋口(2018)は縦断研究から、ゲーム依存になりやすい人(危険因子)について、ゲーム時間が長い、ゲームにまつわる問題が多い、ゲームを肯定する傾向がある、男性である、母子・父子家庭である、友人がいない(少ない)をあげている。岡田(2014)は、インターネット・ゲームにはまりやすい2つのパーソナリティとして、①衝動的で新しい刺激を求めるタイプ、②社会的能力が低く、回避的なタイプをあげている。樋口や岡田からは、ネット依存に陥るリスク要因として、本人の内面に起因することも挙げられている。

藤井(2019)は、大学生248人の調査から、ネット依存傾向と幼少期からの愛着スタイルとの関連について分析し、ネット使用時間と愛着スタイルとの間に明確な関連を認め、不安型愛着スタイルの人(岡田(2019)によると相手にどう思われているか、他人の評価を気にする傾向が強い。その一方で、自分の期待に反することがあると、強い失望や怒り、嫌悪を示す)は、ネット依存傾向が中程度以上に高く、ネット使用時間も長時間になる傾向があると述べている。藤井の研究では、ネット依存に陥るリスク要因として、家族との関係や養育環境の影響も示唆された。

総務省の調査(2014)は、ネット依存傾向の国際比較から、スマートフォン保有者の方が依存傾向が高くなる、と報告している。

以上の先行研究を整理すると、メディア接触増加の要因として、コンテンツや生活満足度、学校での有用感、家族との接し方、本人に起因するなど様々な要因が検討され、報告されている。

先行研究で得られたリスク要因は、全て平常時の研究である。本研究では、臨時休校期間中のメディア接触増加要因として、それらのリスク要因があてはまるかどうかを検証していくとともに、臨時休校中という特別期間だからこそ、新たなリスク要因がありうると考え探究している。

分析にはフリー統計分析ソフトのHAD(清水,2016)を用いた。

3. 研究仮説

2.2の分析の視点(先行研究の整理)から、以下の2つについて分析の視点を立て、研究仮説とした。

- (1) 日中に子どもだけで過ごしているとメディア接触が増える。

メディア機器を制御や管理する人がいないとメディア接触は増えることが予想されるし、伊藤(2018)では生活への不満足がネット依存のリスク要因とされている。学校や部活、友達との交流がないといった現実生活での不満足の穴埋めのためにメディア接触が増えるのではないかと。

- (2) 新たに使い始めた機器がスマホの場合、メディア接触が増える。

総務省調査から、スマートフォン利用が最も依存傾向が強くなるため、特に臨時休校期間中に

新たにスマホを使い始めた場合、平常時では学校があり、自由に使用できる時間は少なくなるが、臨時休校期間中に自由な時間が増えた分、メディア接触が増えるのではないか。

以上を研究仮説として設定するとともに、探索的な視点としてメディア接触以外の活動をした場合のメディア接触の変化を確かめ、メディア接触以外の活動とメディア接触の変化についてどのような関係があるのか、分析を試みた。

4. 分析結果

4.1. 児童学年とメディア接触増加

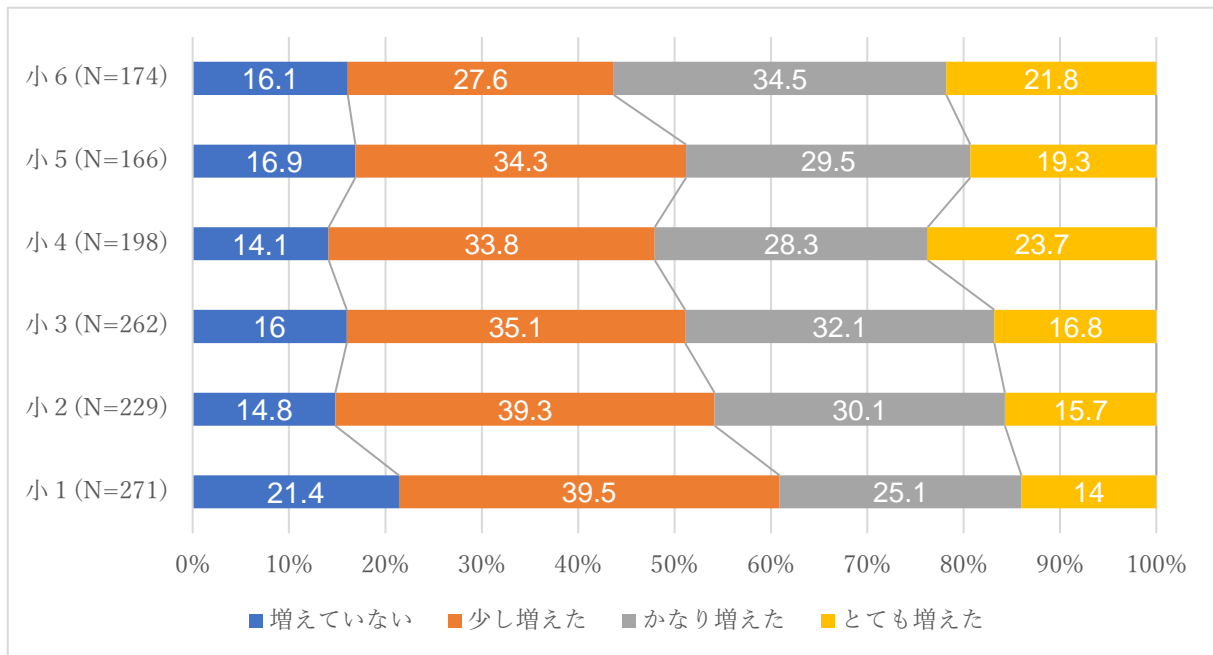


図1 児童学年別の休校期間中のメディア接触との関係

図1は、休校中にメディア接触が増えたどうかを聞いている質問を学年ごとにクロス集計したものである。「少し増えた」「かなり増えた」「とても増えた」の3項目の合計は、どの学年も、8割程度だった。

4.2. 日中の様子とメディア接触増加

表2は日中の過ごし方とメディア接触増加の関係についてクロス集計したものである。残差分析を行った結果、「自宅で一人で過ごした」場合の「とても増えた」と「学童クラブに通っている」場合の「増えていない」が有意に多く、「学童クラブに通っている」場合の「とても増えた」が有意に少ないことがわかった。しかし、「自宅で保護者と過ごしている」場合や「自宅で祖父母と過ごしている」群も8割程度メディア接触が「増えている」ことがわかった。

表 2 日中の様子とメディア接触増加の関係（上段が度数，下段が割合）

変数	出現値	Q6 休校中にメディア接触が増えましたか？			
		増えていない	少し増えた	かなり増えた	とても増えた
どのよう に過 ごし て いま した か？ （休 校 期 間 中 は、 お 子 さ ん は 日 中	自宅1人 (N=97)	17 (17.53%)	29 (29.90%)	25 (25.77%)	26 (26.80%)
	自宅子どもだけ (N=118)	19 (16.10%)	42 (35.59%)	40 (33.90%)	17 (14.41%)
	自宅保護者 (N=929)	146 (15.72%)	335 (36.06%)	278 (29.92%)	170 (18.30%)
	祖父母 (N=58)	12 (20.69%)	18 (31.03%)	18 (31.03%)	10 (17.24%)
	学童 (N=57)	18 ** (31.58%)	24 (42.11%)	12 (21.05%)	3 ** (5.26%)
	学校 (N=11)	3 (27.27%)	4 (36.36%)	3 (27.27%)	1 (9.09%)
	その他 (N=30)	3 (10.00%)	9 (30.00%)	10 (33.33%)	8 (26.67%)
	合計	218	461	386	235

* p < .05 ** p < .01

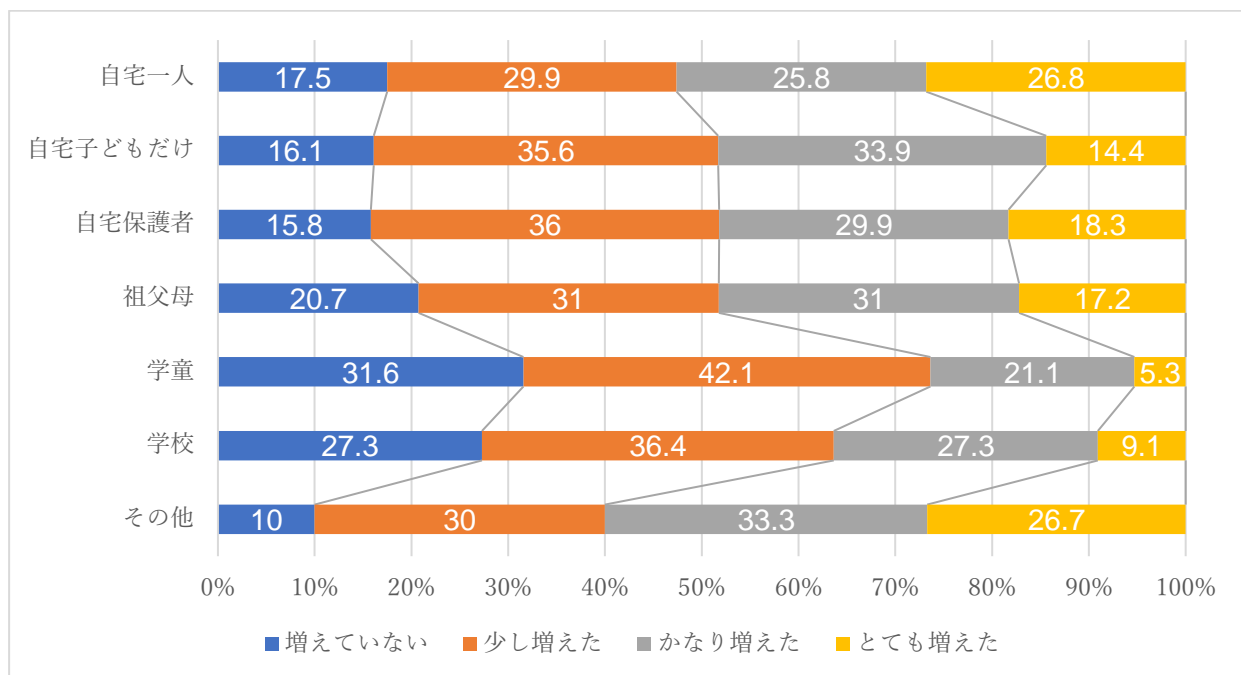


図 2 日中の過ごし方とメディア接触増加の関係

4.3. 新たに使い始めた機器とメディア接触

表 3 および図 3.1~3.6 (pp. 7-9) は、臨時休校中に新たに使い始めた機器とメディア接触増加の関係についてクロス集計したものである。残差分析を行ったが、特徴的な結果は得られなかった。

表3 メディア接触増加と新たに使い始めた機器の関係（上段が度数，下段が割合）

変数	出現値	Q6 休校中にメディア接触が増えましたか？			
		増えていない	少し増えた	かなり増えた	とても増えた
Q7-1	該当しない (N=1, 142)	196 (17.16%)	415 (36.34%)	324 (28.37%)	207 (18.13%)
スマホ	使い始めた (N=158)	22 (13.92%)	46 (29.11%)	62 (39.24%)	28 (17.72%)
Q7-2	該当しない (N=1, 149)	197 (17.15%)	403 (35.07%)	333 (28.98%)	216 (18.80%)
PC	使い始めた (N=151)	21 (13.91%)	58 (35.07%)	53 (35.10%)	19 (12.58%)
Q7-3	該当しない (N=1, 119)	190 (16.98%)	396 (35.39%)	326 (29.13%)	207 (18.50%)
タブレット	使い始めた (N=181)	28 (15.47%)	65 (35.91%)	60 (33.15%)	28 (15.47%)
Q7-4	該当しない (N=1, 191)	205 (17.21%)	430 (36.10%)	347 (29.14%)	209 (17.55%)
ゲーム機	使い始めた (N=109)	13 (11.93%)	31 (28.44%)	39 (35.78%)	26 (23.85%)
Q7-5	該当しない (N=1298)	218 (16.80%)	461 (35.52%)	385 (29.66%)	234 (18.03%)
その他	使い始めた (N=2)	0	0	1 (50.00%)	1 (50.00%)
Q7-6	該当しない (N=568)	99 (17.43%)	207 (36.44%)	173 (30.46%)	89 (15.67%)
新たな機器なし	該当する (N=732)	119 (16.26%)	254 (34.70%)	213 (29.10%)	146 (19.95%)

*p<.05 **p<.01

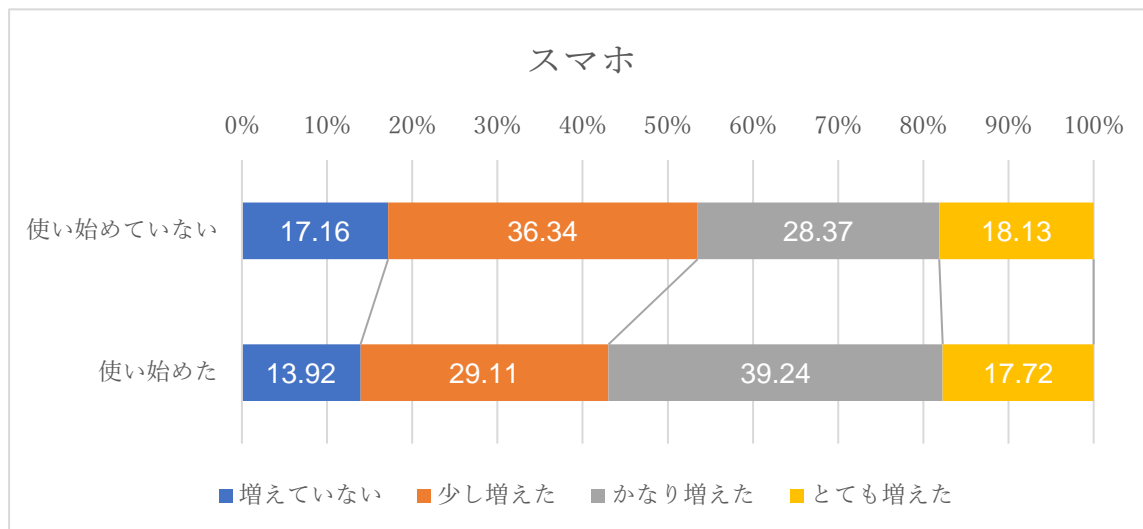


図3.1 新たに使い始めた機器（スマホ）とメディア接触増加の関係

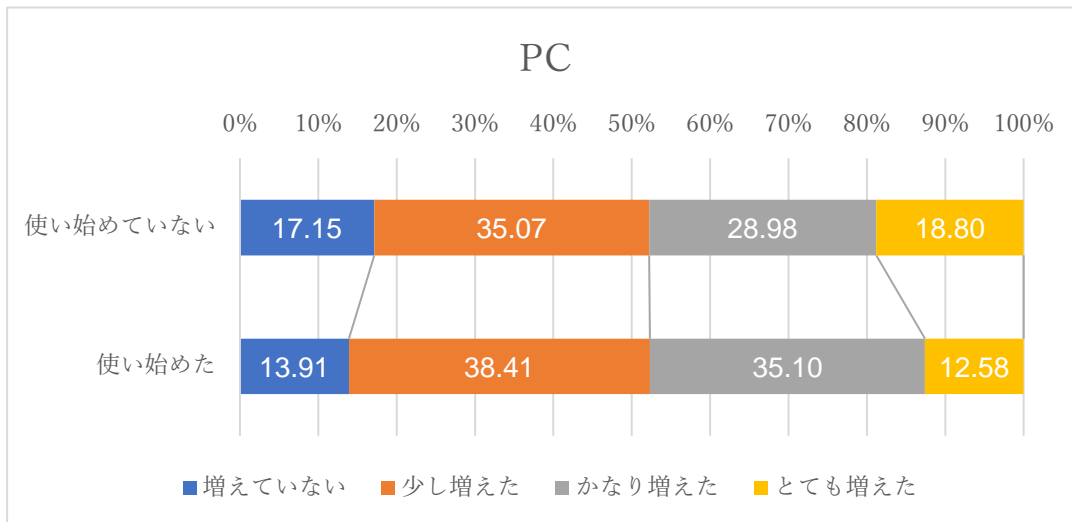


図 3.2 新たに使い始めた機器（PC）とメディア接触増加の関係

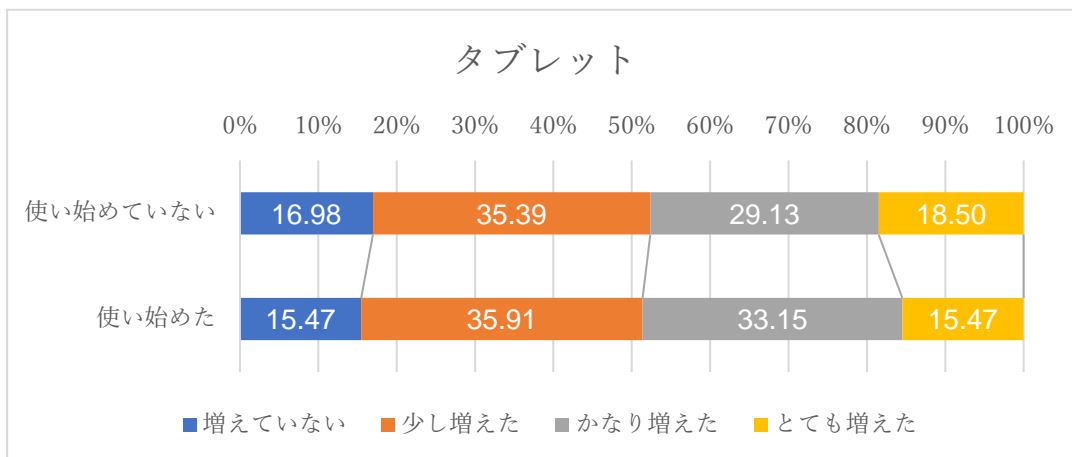


図 3.3 新たに使い始めた機器（タブレット）とメディア接触増加の関係

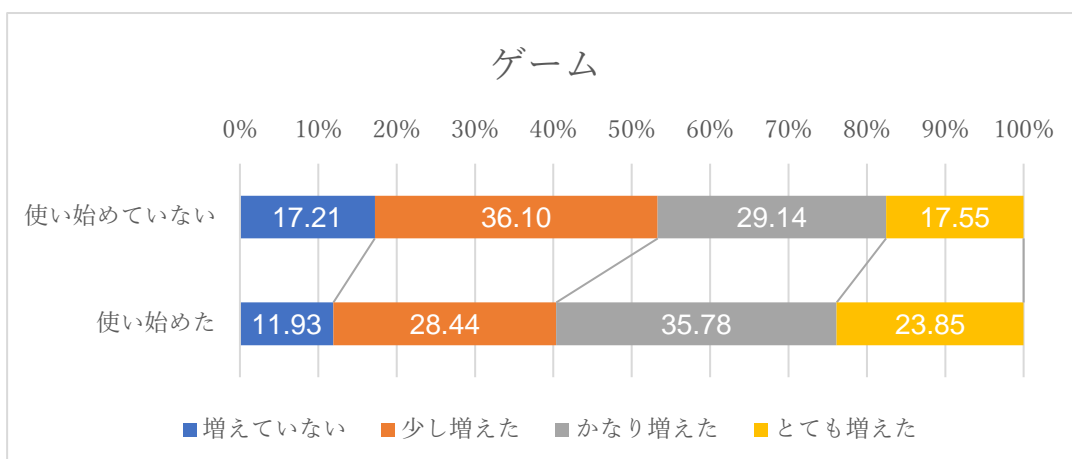


図 3.4 新たに使い始めた機器（ゲーム）とメディア接触増加の関係

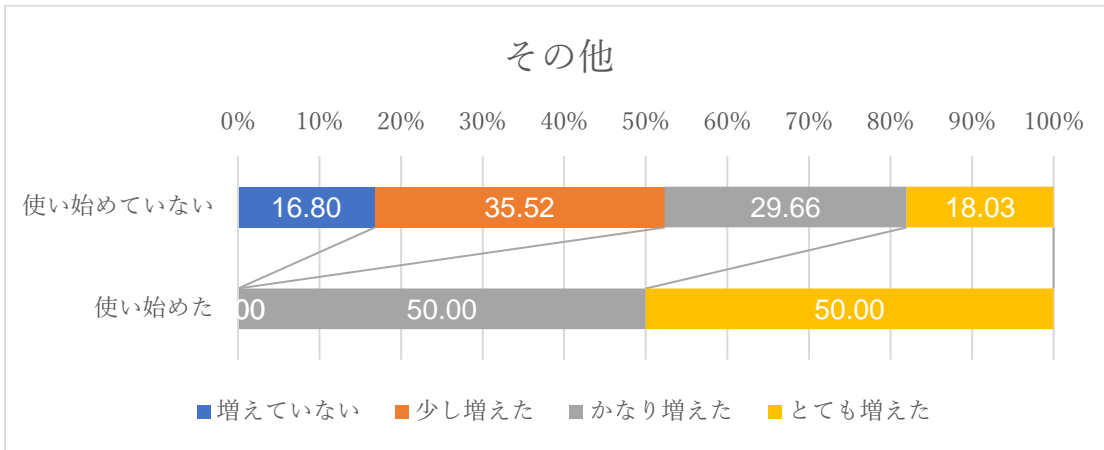


図 3.5 新たに使い始めた機器（その他）とメディア接触増加の関係

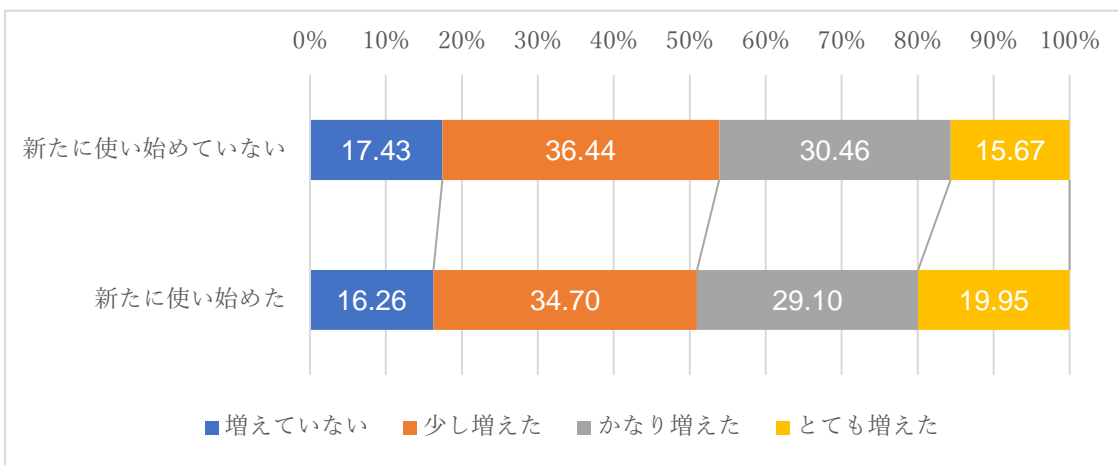


図 3.6 新たに使い始めた機器とメディア接触増加の関係

4.4. メディア接触以外の活動とメディア接触増加の関係

今回分析に用いたメディア接触以外の活動の調査項目は、新型コロナ禍メディア調査の「生活の変化」の質問で、メディア接触を含まないものを抽出して分析した。以下に、音楽を聴く（表 4・図 4）、紙の本を読む（表 5・図 5）、家の中で体を動かす（表 6・図 6）、公園等野外で体を動かす（表 7・図 7）、手伝いをする（表 8・図 8）、家族との会話（表 9・図 9）、学校含めた一日の学習時間（表 10・図 10）、料理・お菓子づくり（表 11・図 11）の結果を示す。

表4 「音楽を聴く」とメディア接触増加の関係（上段が度数，下段が割合）

変数	Q6 休校中にメディア接触が増えましたか？				
	出現値	増えて いない	少し 増えた	かなり 増えた	とても 増えた
Q10.1	増えた (N=282)	28 ** (9.93%)	82 ** (29.08%)	100 ** (35.46%)	72 ** (25.53%)
音楽を 聴く	減った (N=22)	5 (22.73%)	8 (36.36%)	3 (13.64%)	6 (27.27%)
	変わらない (N=563)	94 (16.70%)	240 ** (42.63%)	152 (27.00%)	77 ** (13.68%)
	していない (N=433)	91 ** (21.02%)	131 ** (30.25%)	131 (30.25%)	80 (18.48%)

*p<.05 **p<.01

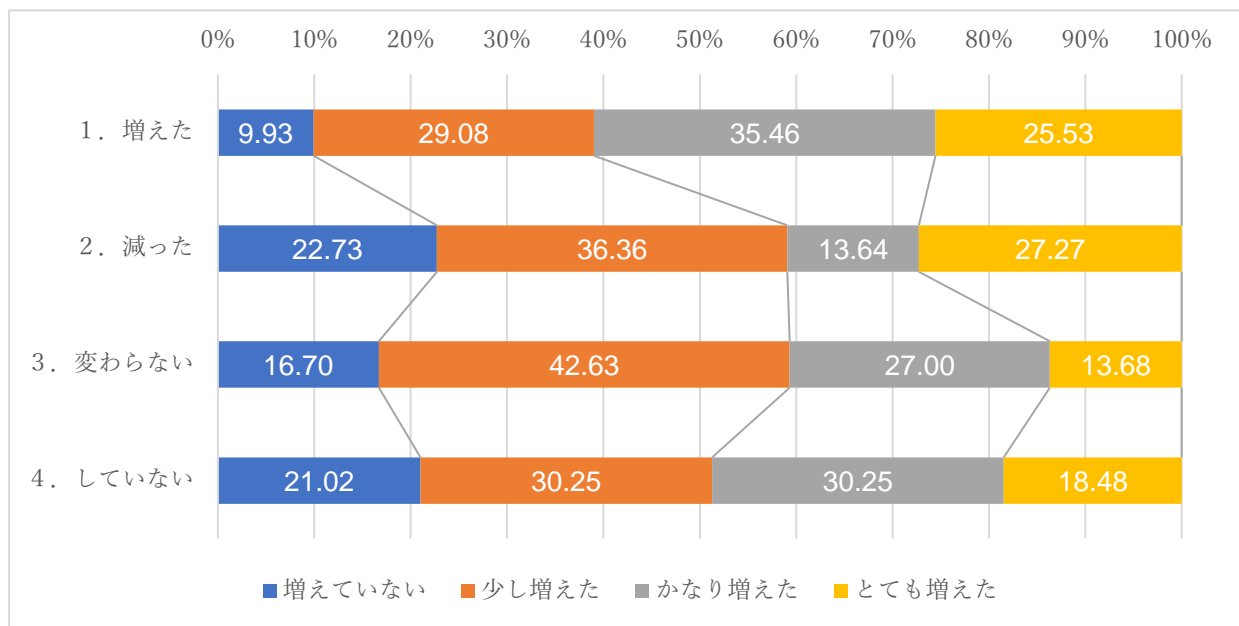


図4 「音楽を聴く」とメディア接触増加の関係

表5 「紙の本（マンガを含む）を読む」とメディア接触増加の関係

変数	Q6 休校中にメディア接触が増えましたか？				
	出現値	増えて いない	少し 増えた	かなり 増えた	とても 増えた
Q10.3	増えた (N=460)	66 (14.35%)	172 (37.39%)	142 (30.87%)	80 (17.39%)
紙の本 (マン ガを含 む)を 読む	減った (N=47)	2 (4.26%)	16 (34.04%)	15 (31.91%)	14 (29.79%)
	変わらない (N=900)	99 * (19.80%)	194 * (38.80%)	143 (28.60%)	64 ** (12.80%)
	していない (N=293)	51 (17.41%)	79 ** (26.96%)	86 (29.35%)	77 ** (26.28%)

*p<.05 **p<.01

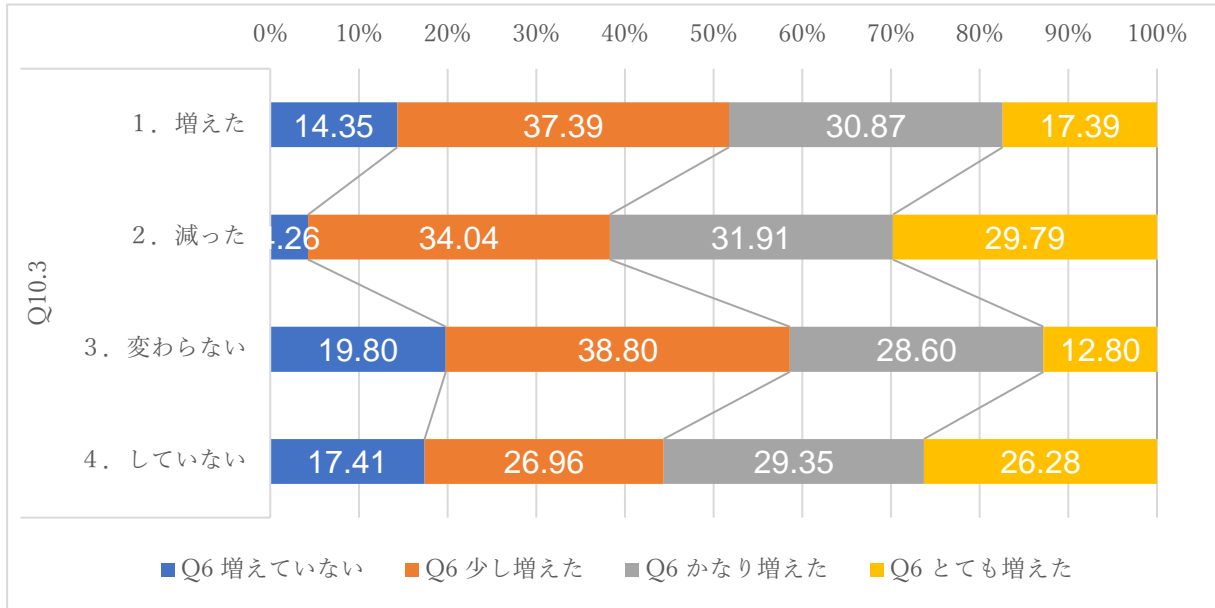


図5 「紙の本（マンガを含む）を読む」とメディア接触増加の関係

表6 「家の中で体を動かす」とメディア接触増加の関係

		Q6 休校中にメディア接触が増えましたか？			
出現値		増えて いない	少し 増えた	かなり 増えた	とても 増えた
Q10.5	増えた (N=425)	61 (14.35%)	165 (38.82%)	136 (32.00%)	63 (14.82%)
家の中 で体を 動かす	減った (N=146)	19 (13.01%)	47 (32.19%)	49 (33.56%)	31 (21.23%)
	変わらない (N=515)	107 ** (20.78%)	194 (37.67%)	137 * (26.60%)	77 (14.95%)
	していない (N=214)	31 (14.49%)	55 ** (25.70%)	64 (29.91%)	64 ** (29.91%)

*p<.05 **p<.01

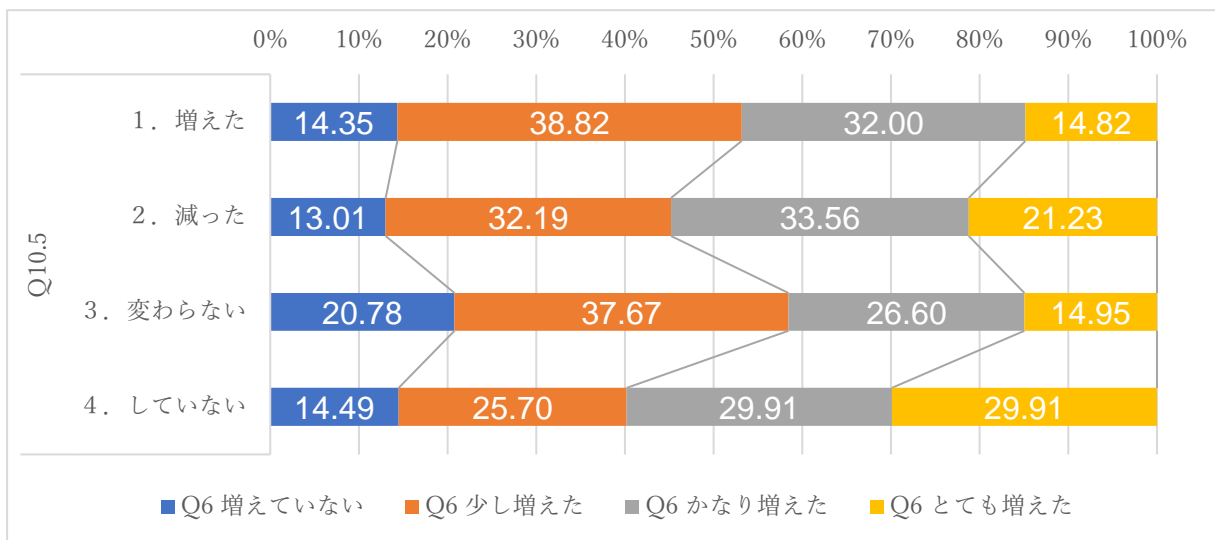


図6 「家の中で体を動かす」とメディア接触増加の関係

表7 「公園等, 野外で体を動かす」とメディア接触増加の関係

		Q6 休校中にメディア接触が増えましたか？			
出現値		増えて いない	少し 増えた	かなり 増えた	とても 増えた
Q10.6 公園等, 野外で 体を動 かす	増えた (N=321)	76 ** (23.68%)	112 (34.89%)	89 (27.73%)	44 * (13.71%)
	減った (N=505)	58 ** (11.49%)	169 (33.47%)	171 ** (33.86%)	107 * (21.19%)
	変わらない (N=277)	60 * (21.66%)	125 ** (45.13%)	58 ** (20.94%)	34 ** (12.27%)
	していない (N=197)	24 (12.18%)	55 * (27.92%)	68 (34.52%)	50 ** (25.38%)

*p<.05 **p<.01

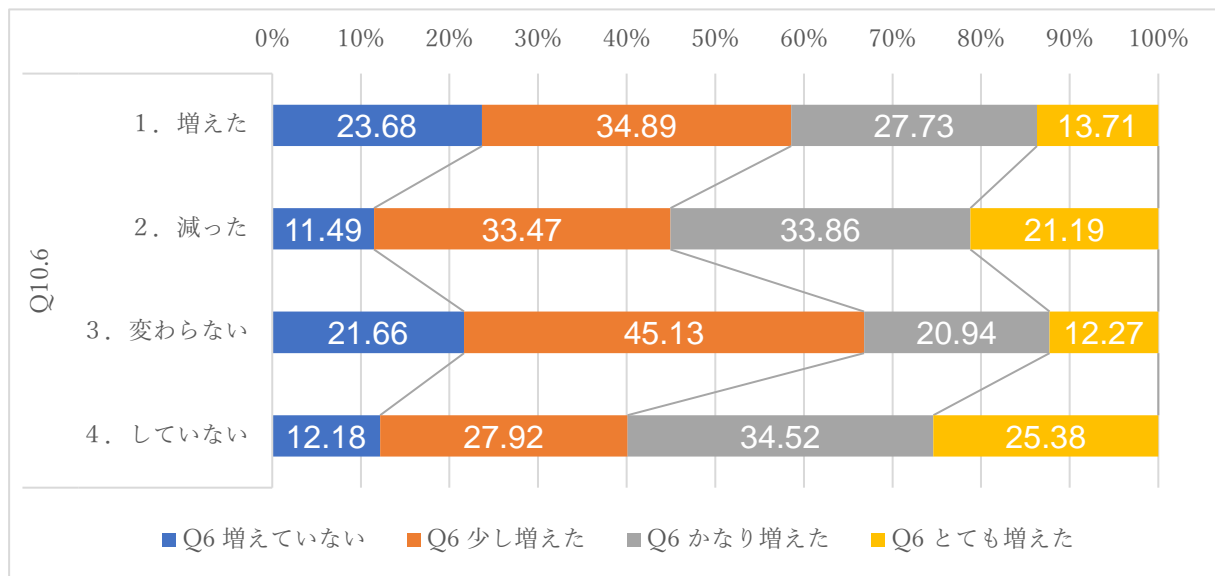


図7 「公園等, 野外で体を動かす」とメディア接触増加の関係

表8 「手伝いをする」とメディア接触増加の関係

		Q6 休校中にメディア接触が増えましたか？			
出現値		増えて いない	少し 増えた	かなり 増えた	とても 増えた
Q10.9 手伝い をする	増えた (N=527)	90 (17.08%)	188 (35.67%)	163 (30.93%)	86 (16.32%)
	減った (N=34)	7 (20.59%)	11 (32.35%)	8 (23.53%)	8 (23.53%)
	変わらない (N=609)	94 (15.44%)	229 (37.60%)	180 (29.56%)	106 (17.41%)
	していない (N=130)	27 (20.77%)	33 * (25.38%)	35 (26.92%)	35 ** (26.92%)

*p<.05 **p<.01

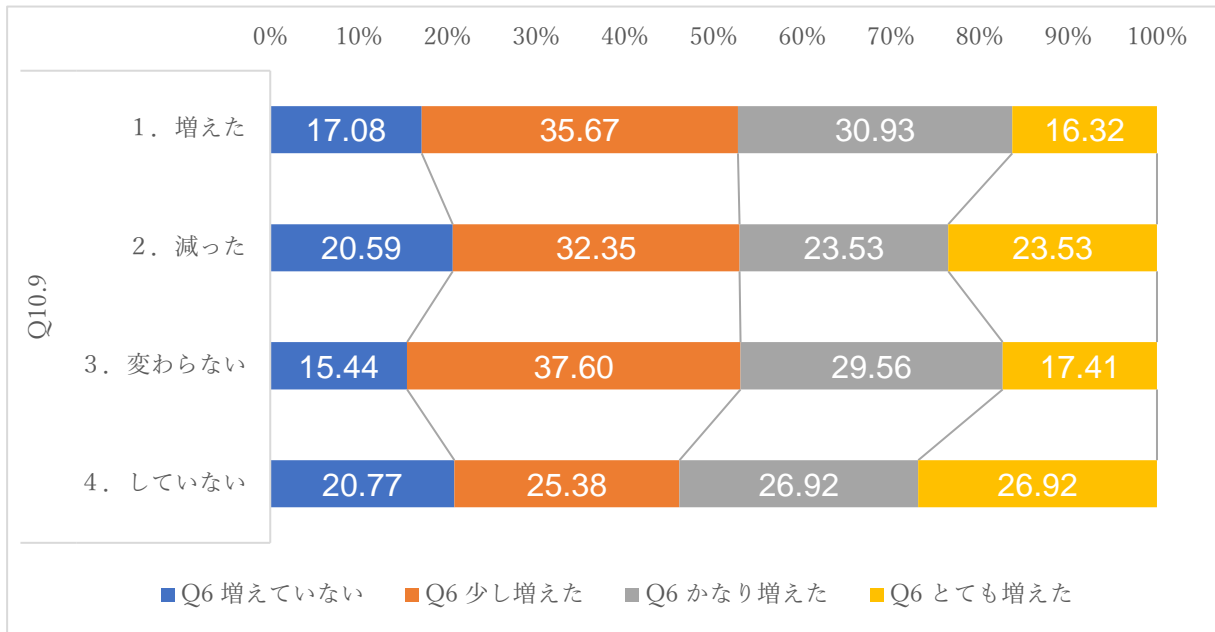


図8 「手伝いをする」とメディア接触増加の関係

表9 「家族との会話」とメディア接触増加の関係

		Q6 休校中にメディア接触が増えましたか？			
出現値		増えて いない	少し 増えた	かなり 増えた	とても 増えた
Q10.10 家族と の会話	増えた (N=790)	119 * (15.06%)	278 (35.19%)	248 (31.39%)	145 (18.35%)
	減った (N=28)	4 (14.29%)	8 (28.57%)	8 (28.57%)	8 (28.57%)
	変わらない (N=454)	88 (19.38%)	166 (36.56%)	122 (26.87%)	78 (17.18%)
	していない (N=28)	7 (25.00%)	9 (32.14%)	8 (28.57%)	4 (14.29%)

*p<.05 **p<.01

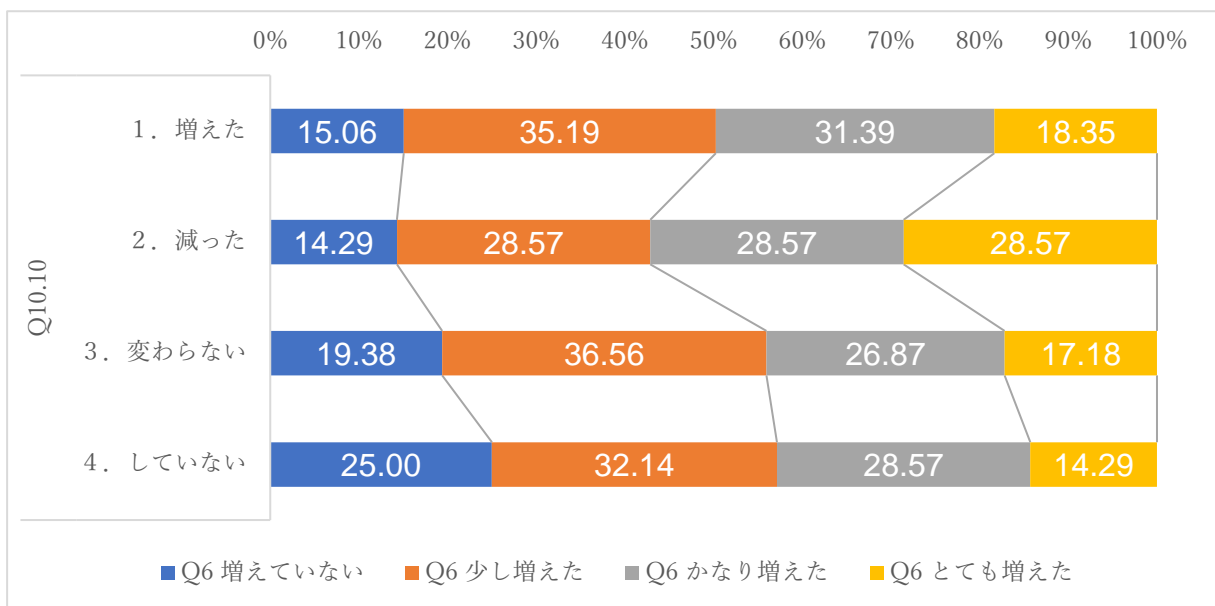


図9 「家族との会話」とメディア接触増加の関係

表 10 「学校を含めた一日の学習時間」とメディア接触増加の関係

		Q6 休校中にメディア接触が増えましたか？				
出現値		増えて いない	少し 増えた	かなり 増えた	とても 増えた	
Q10.11	増えた (N=297)	49 (16.50%)	115 (38.72%)	87 (29.29%)	46 (15.49%)	
学校を 含めた 一日の 学習時 間	減った (N=509)	56 ** (11.00%)	152 ** (29.86%)	173 ** (33.99%)	128 ** (25.15%)	
	変わらない (N=433)	100 ** (23.09%)	178 ** (41.11%)	109 * (25.17%)	46 ** (10.62%)	
	していない (N=61)	13 (21.31%)	16 (26.23%)	17 (27.87%)	15 (24.59%)	

*p<.05 **p<.01

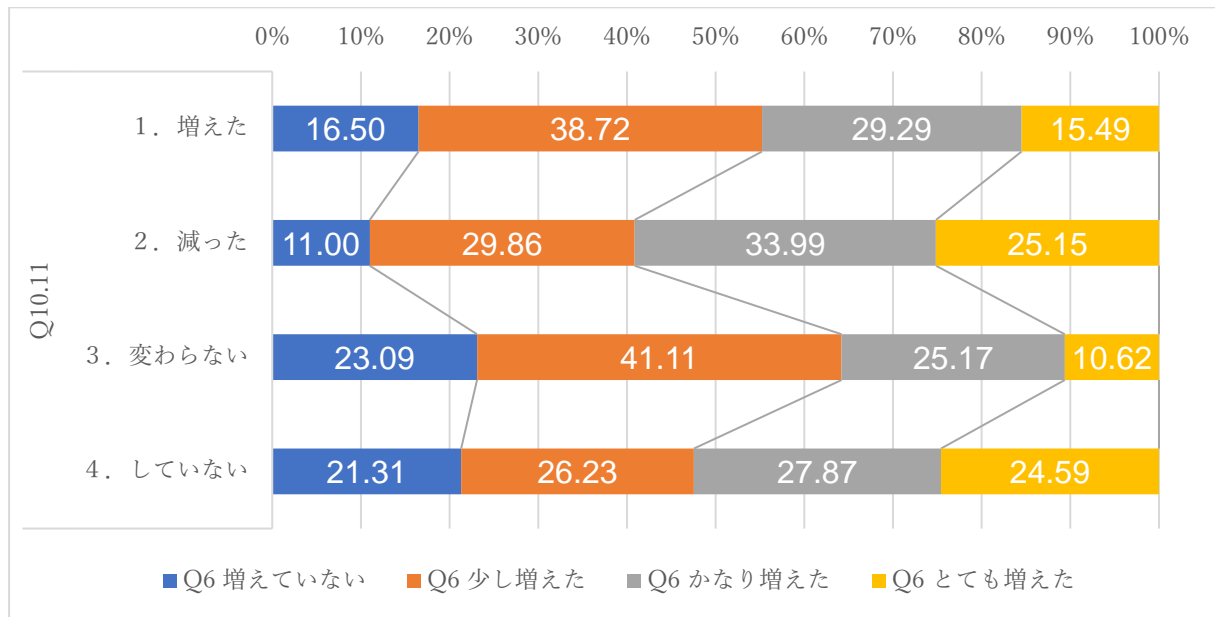


図 10 「学校を含めた一日の学習時間」とメディア接触増加の関係

表 11 「料理, お菓子づくり」とメディア接触増加の関係

		Q6 休校中にメディア接触が増えましたか？				
出現値		増えて いない	少し 増えた	かなり 増えた	とても 増えた	
Q10.12	増えた (N=476)	69 (14.50%)	172 (36.13%)	141 (29.62%)	94 (19.75%)	
料理, お 菓子づ くり	減った (N=42)	9 (21.43%)	15 (35.71%)	16 (38.10%)	2 (4.76%)	
	変わらない (N=413)	75 (18.16%)	172 ** (41.65%)	105 * (25.42%)	61 * (14.77%)	
	していない (N=369)	65 (17.62%)	102 ** (27.64%)	124 (33.60%)	78 (21.14%)	

*p<.05 **p<.01

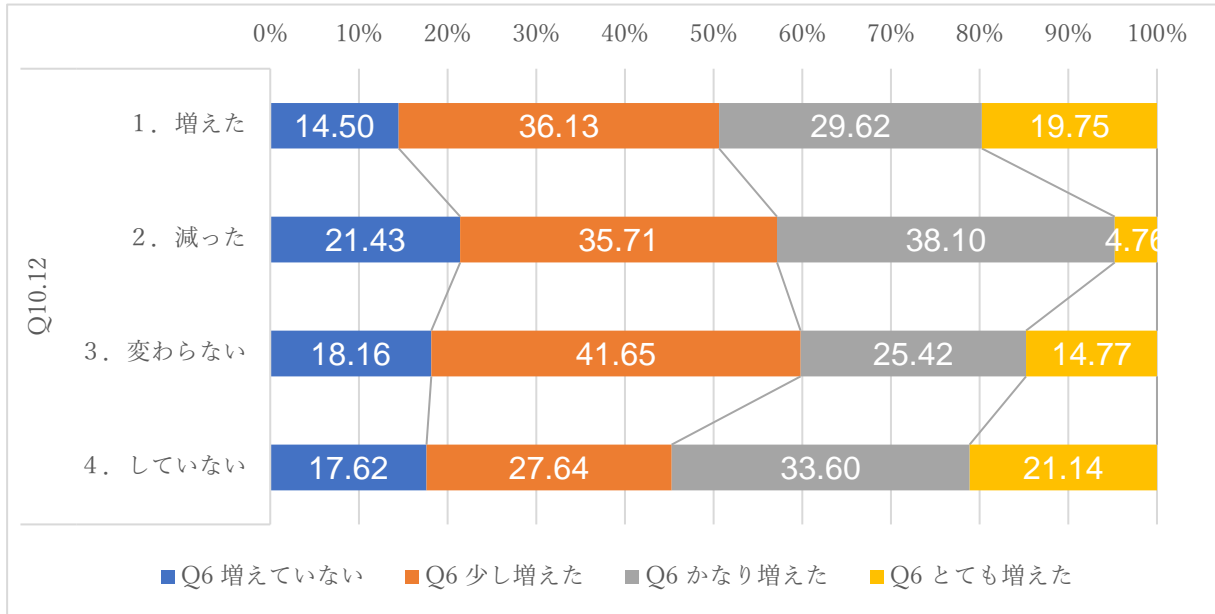


図 11 「料理、お菓子づくり」とメディア接触増加の関係

表 4～表 11 の残差分析結果から、メディア接触が「増えていない」項目のみ、調整された標準化残差の値を高いもの（有意に多いもの）を抜き出していくと下記のようなになる。5%水準で有意となる 1.96 以上のもののみ掲載する。

表 12 休校中のメディア接触以外の活動とメディア接触が「増えていない」

	項目	調整された標準化残差 値
「増えていない」	学校を含めた一日の学習時間が「変わらない」	4.314
	公園等、野外で体を動かすことが「増えた」	3.817
	家の中で体を動かすことが「変わらない」	3.133
	音楽を聴くを「していない」	2.897
	公園等、野外で体を動かすことが「変わらない」	2.456
	紙の本（マンガ本を含む）を読むが「変わらない」	2.312

さらに、メディア接触が「とても増えた」項目を同様に抽出すると以下のようなになる。5%水準で有意となる 1.96 以上のもののみ掲載する。

4. 考察

本研究の研究仮説と照らし合わせ、休校中のメディア接触増加要因として、以下のことがいえる。

一点目は、自宅で子どもだけで過ごしていることである。表 2 から、日中に自宅で一人で過ごしている場合、最もメディア接触が増え（26.8%、有意差あり）、また、兄弟と一緒にでもメディア接触が増えていることがわかった。研究仮説 1 からも学校に通えない、外出できないといったストレスが生活

表 13 休校中のメディア接触以外の活動とメディア接触が「とても増えた」

	項目	調整された標準化残差 値
「とても増えた」	学校を含めた一日の学習時間が「減った」	5.314
	家の中で体を動かすことを「していない」	4.920
	紙の本（マンガ本を含む）を読むを「していない」	4.146
	音楽を聴くが「増えた」	3.676
	公園等，野外で体を動かすことを「していない」	2.892
	手伝いをするを「していない」	2.763
	家の中で体を動かすことが「減った」	2.323
	紙の本（マンガ本を含む）を読むが「減った」	2.125

不満足につながり、メディア接触増加を助長していたのではないかと考えられる。しかし、今回のような緊急事態中であれば、保護者や祖父母と一緒に8割程度、メディア接触が増えていることがわかった。長期にわたる臨時休校や外出自粛で活動や生活が制限されたことが一因であると考えられる。今後、長期にわたる臨時休校や新型コロナウイルス感染症拡大が続いた場合、ネットやゲームの代替になる活動を具体的に提案し、子どもたちを支援していく必要があると考えられる。

二点目は、今回新たに使い始めた機器がメディア接触増加を促した要因ではないことである。表3から、新たに使い始めた機器とメディア接触増減の統計的な有意な関係は認められなかった。しかし、スマホと他の機器と比べた時に10%程度「かなり増えた」「とても増えた」が多いことがわかった。これは新たに使い始めた機器がゲーム機の場合も同様である。あくまでも今回の調査に限ってはあなが、機器とメディア接触増加の関係で特徴的なデータは得られなかった。

また、メディア接触以外の活動とメディア接触増加との関係を分析したところ休校期間中のメディア接触以外の「増えた」行動として、最もメディア接触が「増えていない」と回答したのは、「公園等，野外で体を動かすこと」(23.68%)である。次いで、「手伝いをする」(17.08%)、「学校を含めた一日の学習時間」(16.50%)となる。休校期間中を普段できないことができるのとポジティブに捉え、「自分の好きな運動ができる」「苦手な運動ができるように努力する」「自転車に乗れるようになった」「手伝いを前よりするようになった」等、今までの日常とは違う経験をしたことも本調査の自由記述欄からも読み取れた。普段は、学校や習い事等で忙しい子でも、比較的時間にゆとりが生まれたため、自分の好きな運動ができ、結果としてそれがストレスの軽減や生活の不満足の解消につながり、メディア接触の増加を抑える要因になったのではないかと考えられる。

しかし、元々「野外で体を動かすことが好き」「手伝いをする」ことが習慣化されている子は、普段からメディア接触が少ないことが予想されるため、これらのメディア接触以外の活動が増えたからメディア接触の増加を抑えたという因果関係が明らかになったわけではない。

さらに表 12 の残差分析結果から、「変わらない」という行動がメディア接触の増加と関係があることが示唆された。つまり、臨時休校期間中という特別な期間中においても「一日の学習時間」「家の中で、体を動かすこと」「公園等、野外で体を動かすこと」「紙の本を読むこと」を平常と同じにすることでメディア接触を抑えるのではないかと考えられる。表 13 から「していない」という行動が、メディア接触の増加につながっていることも考えられる。

平常のメディア接触以外の活動を充実させ、臨時休校等の特別期間においても、できる範囲でそれを継続することが、メディア接触を抑えられる一因になるのではないかと考えられる。

また、本調査において、家族との関わりについては、有意な結果は得られなかった。先述した考察で、家族と一緒にメディア接触が増加している実態があったため、家族との会話が増えても、メディア接触は増加していることは当然の結果である。

5. おわりに

仮説に基づいて 3 つの視点が得られたが、今回調査したのはあくまでも保護者であり、子ども自身に回答してもらったものではないため、子どもの様子を的確に捉えたものではない。また、Web 調査という方式をとっているため、保護者の社会的な背景や性別等にバイアスがかかっている可能性は否定できない。今後、平常時において、大規模な調査が必要である。

新型コロナ禍において、いつ臨時休校になってもおかしくない状況であり、また、未知のウイルスの出現や災害等で臨時休校になった際に、メディア接触増加を少しでも抑える手立ての示唆を得られたのではないかと考える。

謝辞

本研究は日本学術振興会による 2020～2023 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 「不健全なインターネット利用により顕在化した健康被害の実態調査と啓発プログラム開発」(課題番号 20H01672) の一環である。事務局長の大谷良光先生(青森大学)には研究活動全般の管理運営のみならず、研究内容にもご指導をいただきました。また、研究分担者の照山絢子先生(筑波大学)にも多くの貴重なご助言をいただきました。研究協力者のウッド一美さん(ぐんま子どもセーフネット活動委員会)からも調査分析にあたって多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

文献

- 厚見由佳・安藤美華代, 2019, 「大学生・大学院生のスマートフォン依存傾向における退屈感と対人関係の関連」『岡山大学教師教育開発センター紀要』第 9 号別冊, pp. 47-56.
- 藤井壽夫, 2019, 「本学学生におけるネット依存傾向と愛着スタイルとの関連について」『函館短期大学紀要』第 46 号, pp. 23-32.
- 藤田依久子, 2018, 「小・中学生のインターネット依存傾向」『安田女子大学大学院紀要』第 23 集, pp. 111-126.
- 古野陽一, 2020, 「子どもたちの放課後とオンライン生活」『月刊 自治研』, 自治研中央推進委員会編,

- 2020年7月, pp. 37-43.
- 樋口進, 2018, 『スマホゲーム依存症』, 内外出版社.
- 伊藤賢一, 2017, 「小中学生のネット依存に関するリスク要因の探究」『群馬大学社会情報学部研究論集』第24巻, pp. 1-14.
- 伊藤賢一, 2018, 「小中学生のネット依存と生活満足度」『群馬大学社会情報学部研究論集』第25巻, pp. 21-37.
- 印南志帆・高橋玲央, 2020, 「外出自粛でゲーム需要急増。任天堂、ソニーの“悩み”」『週刊東洋経済』6921号 (2020年5月16日) <https://premium.toyokeizai.net/articles/-/23582> (最終アクセス: 2020年9月28日)
- LINE株式会社, 2020, 「LINE利用動向に関するレポート」<https://linecorp.com/ja/pr/news/ja/2020/3174> (最終アクセス: 2020年9月24日)
- 三菱UFJリサーチ&コンサルティング, 2020, 「一斉休校等による子どもの生活への影響と保護者の負担感」https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2020/06/survey_covid-19_200602.pdf
- 「ネット健康被害」調査・研究プロジェクト (代表: 伊藤賢一), 2020, 『速報値・簡易報告書 コロナ臨時休校中の小学生メディア接触実態調査報告～小学生のオンライン学習/ゲーム・動画と疲労度の関係～』<http://www.si.gunma-u.ac.jp/~itoken/2020kaken/200709.research.report.pdf>
- 岡田尊司, 2014, 『インターネット・ゲーム依存症 — ネットゲからスマホまで』, 文藝春秋.
- 岡田尊司, 2019, 『社交不安障害』, 幻冬舎新書.
- 清水裕士, 2016, 「フリーの統計分析ソフトHAD — 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案」『メディア・情報・コミュニケーション研究』1号, pp. 59-73.
- 総務省, 2014, 「ネット依存傾向の国際比較」『情報通信白書 平成26年版』
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/html/nc143110.html>
- TesTeelab, 2020, 『コロナウイルスの影響調査 行動編』https://lab.testee.co/2020_covid_19_result2